



徹夜で飲み明かした行事

こうしん
庚申待ち

庚

申待ちとは聞き慣れない言葉
かも知れませんが、60日に1
度巡ってくる庚申の日に行われる民間
信仰の一つです。この日の夜は地域の
男達が集まり、床の間に「青面金剛像」
などの掛軸を掛け、徹夜をしていま
した。この集まりを庚申講といいます。

庚申の夜は、寝ている間に人の体
内にいる三尸さんしが、天帝てんたい（閻魔王えんまおうとも）
にその人の悪事を告げ、これを聞いた
天帝は、その罪状に応じて、邪鬼じょうきに
命じその人の寿命を縮めるとされま
す。このため講衆は本尊を祀り、酒食
を持ち寄り、皆で夜を明かしていま
した。

ちなみに三尸とは、人間の頭と腹
と足にいる虫（上尸じょうし・中尸ちゅうし・下尸げし）で、
いつもその人の悪事を監視していると
います。

庚申信仰は、平安時代に貴族の間
で始まり、江戸時代には民衆を通して
全国に広がり、人々は長生きをするた
めに、これを信じて盛んに行っていま
した。

庚申の日は60日に1回巡ってくる
ので、年に6〜7回行われます。庚申
待ちを3年間続けた記念に建立された
ものが庚申塔（庚申講碑）で、市内に

も数か所（切通・七村・寺田・深川な
ど）残っています。また、講衆が寄進
した石造物（中須田木の阿弥陀三尊や
笠木の石灯籠など）もあり、庚申講に
関する掛軸や石碑は、まだまだ市内に
現存していると思われます。

また農村では、馬頭観音講や田の
神講、山の神講などと習合するなど、
地域によって独自の変化を遂げていっ
たようで、財部の谷川内では庚申講衆

庚申待ちの掛軸

一般的には青面金剛像・邪鬼・
二童子・三猿・二鶏・日・月・四
夜叉などが描かれますが、地域に



よってその組み合わせはまちまち
です。

青面金剛は仏教における庚申の
本尊とされ、憤怒の形相で邪鬼を
踏みつけた姿で描かれています。

が田の神像を造った事例もあります。
昔は地域の人々のコミュニケーション
やストレス発散、経済的な相
互扶助の意味合いもあり、どこでも
実施されていた庚申待ちですが、時
代の変化とともに次第に消滅し、市
内でも昔ながらの形態で実施してい
る地域は無いと思われます。もし現
在も簡素化してでも継続している地
域がありましたら、お教えください。